

氏名(本籍地)	瀬戸山 聡子(東京都)		
学位の種類	博士(学術)		
学位記番号	博甲第64号		
学位授与年月日	平成25年3月16日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第1項該当		
論文題目	現代日本女性の中年期危機に対するソーシャル・サポートと容姿を維持向上する努力の効果		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	藤崎 春代
	(副査)	昭和女子大学教授	掛川 典子
		昭和女子大学教授	鶴養 啓子
		白梅学園大学教授	無藤 隆

## 論文要旨

人の一生を発達的にとらえる生涯発達心理学は、その視点の重要性が指摘されつつも、研究対象としては乳幼児期から青年期にある者が中心であり、成人期の中でも中年期については実証的研究が乏しい現状にある。そうした中で、本論文は、現代日本の中年期女性を対象として、知覚されたソーシャル・サポートと自分の容姿を維持向上する努力が中年期危機に及ぼす予防・軽減効果について実証的に検討したものである。

第1章では、中年期の発達課題と発達課題としての中年期危機についての先行研究を概観して、発達課題を「喪失体験による役割の変化についての課題」と「老いの始まりの認識による死をめぐる課題」の2つに整理するとともに、現代日本女性の中年期危機の予防・軽減要因として知覚されたソーシャル・サポートと容姿を維持向上する努力とを想定した。そして、理論仮説として①ソーシャル・サポートと容姿を維持向上する努力は自尊感情を増加させ間接的に中年期危機を軽減させる、②ソーシャル・サポートと容姿を維持向上する努力は直接的に中年期危機を低下させる、を立てて仮説モデルを提案した。

第2章では、研究の出発点として、現代日本女性の考える中年期の時期区分を明らかにするために探索的研究を行った。中年期女性と青年期女性との世代間比較の結果、世の中一般的に考える中年期の時期区分について、中年期女性の方が青年期女性よりも開始年齢も終了年齢も高く捉えていた。また中年期女性の中でも、世の中一般的に考える中年期の時期区分と自分自身としての時期区分との間でズレがあり、自分自身としての時期区分の方が開始年齢も終了年齢も高く捉えていた。これらの結果から、中年期女性自身が世の中一般的に考える中年期の時期区分をコア中年期、自分自身としての時期区分を主観的中年期として、以降の分析に用いることとした。なお、中年期の開始理由については世代を問

わず [若さの喪失] が多く挙げられており、[若さの喪失]が中年期初期の危機として該当する可能性が示唆された。

第3章では、中年期危機を捉えるための尺度として現代日本女性用中年期危機尺度を作成した。長尾(1990)をベースに、中年期女性への面接調査より得られた[容姿の衰え]・[「オバサン」の自覚]の項目を反映した尺度の作成を試みた結果、<今後の生き方の模索>・<若さの喪失感>・<体力と気力の衰え感>・<死別恐怖>の4因子17項目が得られた。尺度得点の年齢間比較と家族状況間比較からは、中年期の年齢群(前期群:最年少~40歳代、後期群:50歳代~最年長)とライフスタイル(家族状況により4群分け:既婚・子有り群、既婚・子無し群、未婚・子無し群、離/死別・子有り群)についての考慮の必要性が確認された。

第4章では、中年期女性用ソーシャル・サポート尺度として「Jichi Medical School ソーシャルサポートスケール」(堤ら、1994;堤ら、2000)を選択し、本論文の趣旨に沿い使用方法を修正して用いた。ソーシャル・サポート源としてパートナー・パートナー以外の家族・友人を想定して、知覚されたサポート源の数が多きほど個人総得点が高くなるかを確認した。結果、サポート源の数の多さがより多くのサポートを受けているという知覚には繋がらないことが示され、この後の分析では個人総得点をソーシャル・サポート得点として用いることとした。

第5章では、中年期女性用の容姿維持向上努力尺度を作成した。結果、<オシャレ行動>・<身体・健康への取組み>の2因子17項目が得られた。中年期女性は自分らしさやスキンケアがオシャレの中に取り入れられており、健康でいることも容姿を維持向上する努力の1つと考えていることが推測された。また中年期女性の容姿を維持向上する努力の目的は、他者のために行う場合には就業との関連が推察されたが、自分のために行う場合には容姿の衰えを軽減させ精神的健康を保つという、中年期危機への対応に該当することが示唆された。

第6章では、構造方程式モデリングを用いて第1章で提案した現代日本女性の中年期危機の予防と軽減についての仮説検証とモデル構築を行った。その際、対象を年齢群に分けた分析によりモデルが構築され、仮説①のみが支持された。さらに家族状況別のモデル構築も行い、既婚・子有り群と未婚・子無し群とで異なるモデルが構築された。既婚・子有り群は対象を2群に分けたモデルとなり仮説①のみが支持され、未婚・子無し群は対象を年齢群に分けないモデルとなり仮説②のみが支持された。既婚・子無し群と離/死別・子有り群はモデルが構築できなかった。

第7章では本論文の研究結果の総合的考察を踏まえて、中年期女性にとっての老いの課題の重要性、知覚されたソーシャル・サポートと容姿を維持向上する努力とが女性の中年期危機を低減する効果の可能性について論じた。